はじまりの風（1）

蜂飼 耳

（中学生になったら新しいことを始めたいと思っていたレンは、何を始めたらよいかがわからず、周りの友達が小学生のうちからやっていた音楽やスポーツを続ける中、取り残されたような気がしていました。ある日レンは学校の廊下に掛けられていた絵に引きこまれ、次の日曜日にその絵に描かれていたいちょう並木のもとを訪れました。）

並木に沿って、しばらく歩くと、時計が見えてきた。①レンは、はっとした。ちょうど、ここから見た風景だ、②あの絵。そう気づいたのだ。絵の中では、並木のすぐそばに時計が描かれていたから、まさにこの位置からの眺めにちがいない。

絵の作者も、ある日、ここに立って辺りを見たのだろう。同じ場所に今、自分も立っている。作者が描いたのと同じ角度から、風景を見ている。この発見に、レンは、ちょっとうれしくなった。ふわりと、風が吹いてきた。やわらかな春の風は、レンの前髪をゆらして過ぎていった。

作者がここに立った季節は、いつだったのだろうか。レンにはわからない。なぜなら、絵の中のいちょう並木は、ピンクと青と緑と黄色で描かれていたからだ。かなり大胆な色使いだが、作者の心には、そのように映ったのだろう。

（中略　翌日の月曜日、レンはまた廊下のいちょう並木の絵を見ていました。）

この絵に、そんなにも引きつけられることが、自分でも不思議だった。

「絵が好きなんだね。」

後ろで声がした。レンは振り向いた。美術の先生だった。

「この前も、ここで見ていたでしょう。」

「はい。これ、あのいちょう並木ですよね。」

「ええ、きっと。これを描いた人、この学校の卒業生なんですよ。」

「そうなんですね。」

先生はレンの横に立った。だまって絵を眺める先生のとなりで、レンもその風景を見つめた。

「見えない風を描いているっていうところがいいよね。」

「風――。」

先生はにっこりした。それから、楽しそうな足取りで美術室へ向かうと、ドアを開け、中に入った。ドアが閉まると、辺りはまた静かになった。薄暗い廊下を、窓からの光が照らしている。

もう一度、レンは、ゆっくりと絵を眺めた。確かに、見えないはずの風が表現されている気がした。少し、どきどきした。自分も絵を描いてみたい、と思った。窓から差しこむ光が少し強くなり、廊下はさっきよりも明るくなった。

そうだ、絵を描いてみよう。新しいことをやってみよう。

ピンクと青と緑と黄色が、色とりどりのそよ風のように動きだす気がした。③レンの心にも、ざわざわと風が吹き始めた。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「レンは、はっとした」とあるが、このときレンは何に気づいたのか。適当なものを選びなさい。

ア 絵に描かれた風景は、いちょう並木とそのそばにある時計だったのだということ。

イ 絵に描かれた風景は、ちょうど今レンが立っている位置から見たものだということ。

ウ 絵に描かれた風景は、作者の心に映ったように描かれていたのだということ。

〔　　〕

(2) ——線②「あの絵」の説明として適当なものを選びなさい。

ア 春のいちょう並木が風に吹かれてゆれる様子を写実的に描いている。

イ 秋にいちょう並木が次第に色づいていく風景が緻密に描かれている。

ウ 作者が捉えた いちょう並木の姿が、大胆な色づかいで描かれている。

〔　　〕

(3) ——線③「レンの心にも、ざわざわと風が吹き始めた」とあるが、この表現が表していることとして適当なものを選びなさい。

ア 絵を描いてみたいという気持ちが芽生え、レンの心に変化が生まれていること。

イ 絵に見えない風が描かれていると知り、レンが絵に引きつけられ始めたこと。

ウ 絵のことで美術の先生に突然話しかけられ、レンが動揺してしまっていること。

〔　　〕